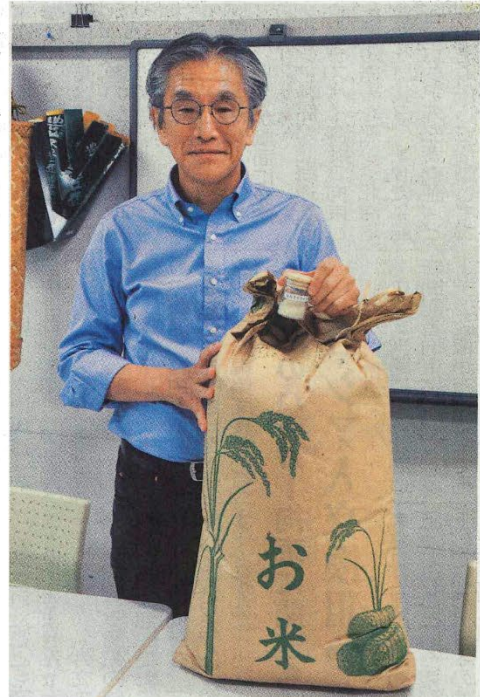


弘大初 水稻の新品種

石川教授ら開発「弘大ライケット1号」登録

高温でも胴割れしにくい特性

「実用化への第一歩」



今年収穫した弘大ライケット1号を紹介する石川教授

弘前大学農学生命科学部の石川隆二教授(64)が、生産から販売までを行う米穀企業「ライケット」(八戸市)と共同開発した水稻の新品種「弘大ライケット1号」が、9月7日付で農林水産省に品種登録された。高温でも胴割れしにくい特性を持ち、猛暑による品質低下の発生を防ぐことが期待される。水稻の品種登録は弘前大初。(稲葉智絵)

夏の高湿や長雨などで増える米の胴割れや白未熟粒(白く濁った米粒)の発生。それらに伴う品質低下が1等米比率を大きく低下させ、生産者の経営と意欲



水稻の新品種に登録された弘大ライケット1号

発に着手。県産の主力品種「まっしぐら」と、香り米として育種されていた「恋ほのか」を交配した。石川教授は「恋ほのかは胴割れ

の発生が少ない品種であることが県産業技術センターの調査で分かっていた。その特性を生かして品種改良を行った」と説明した。

新品種の開発には、夏の高湿下で栽培したコメの中から胴割れの発生が少ないものを選抜する必要があった。そこで、開発当初は新潟県の水田を借りて栽培。その後、本県も猛暑になることが多くなってきたため、2016年からは弘前市内の生産者の協力を得て、同市内の水田と八戸市にあるライケットの水田合わせて約30㌥で栽培を続けた。

出願に向けて動き出した。記録的な猛暑に見舞われ胴割れが多発した23年のデータでは、胴割れ発生率の平均がまっしぐら64・6%に対し、弘大ライケット1号は9・0%と低く、24年以降もほぼ同様のデータが得られた。

そして今年、弘前大初的水稻の品種登録が実現。石川教授は「弘大ライケット1号は胴割れの発生が少なく恋ほのかの特性を受け継いだ。今回の品種登録は実用化への第一歩」と喜びつつも、「(弘大ライケット

1号は)食用品種としては収量が足りない。香りも残っている。新たな品種候補としてきょうだい系統のコメで品種改良を重ねている。県内の生産者が安心して安定した高品質のコメを作れるよう、県や企業など連携して研究を進めていく」と力を込めた。

石川教授は来月8日、同大総合文化祭企画として開催する同学部「市民公開講座」で、弘大ライケット1号や現在開発中の品種候補について講演する。講座では弘大ライケット1号などを試食してもらう。

この画像は、当該ページに限り「陸奥新報」の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。